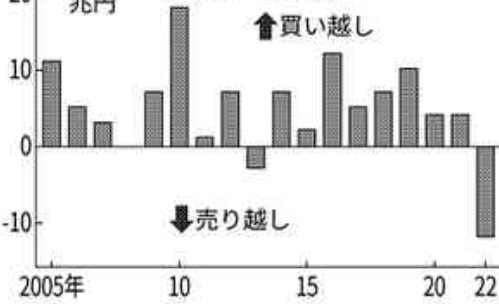


国内マネー、外債売り最大

国内勢の外債売り越しは過去最大

(各年4~9月分)



財務省の統計から集計

4~9月売越額12兆円

米国債需給悪化に拍車

日本国内の投資家による外国債券への売りが加速している。財務省の対外証券投資のデータによると2022年4~9月の中長期債の売越額は12兆円と、遡ることができると05年以降で最大になった。海外金利の上昇に伴う債券価格の下落や為替変動リスクを抑える「ヘッジコスト」の拡大が要因だ。とくに主な投資対象である米国債の需給悪化を通じて米長期金利を押し上げている。

10月以降の週次統計では直近の9~15日の週は6週ぶりに買い越したものの、10月半ばまでの速報値を含めた4~10月の累計額は13兆3000億円の売り越しと05年以降で最大のペースだ。

米国債に限った売買動向でも、国内勢は1~8月に米国の中長期債を12兆円売り越した。米連邦準備理事会（FRB）は保有する米国債の残高を減らす量的引き締め（QT）を進めている。国内勢が1~8月に売り越した12兆円は8月当時のQTの2カ月分を上回る。

債券価格の下落が売却を迫る。国内3メガバンクが6月末時点で抱える外国債券の含み損は約2・6兆円。3月末の1・7兆円から5割増えた。足元の含み損はさらに膨らんでいる可能性が高い。一段の価格下落を警戒し、損失を限定するために売却を余儀なくされるケースも多いようだ。

海外投資に際して為替変動のリスクを抑える為替ヘッジコストの上昇も外債売りを誘う。

ヘッジコストは2国間の金利差で決まり、ドルと円のヘッジコストはFRBの利上げを背景に上昇が続く。QUICKが算出したドル・円のヘッジコストは年初の0・3%程度から上昇して足元は4・8%台。米10年債利回りも4・1%程度まで上昇したものの、年初

に1・3%前後あったへる」と話す。アセットマネジメントOneの清水岳友ファンドマネジャーは「為替ヘッジコストの上昇は続く」とみており、23年いっぱいには積極的に為替ヘッジ付き外国債券を買いづらいう状況が続くだろう」と分析する。

国内生命保険会社の担当者「（海外金利の上昇を受けて）外国債券を当初の想定よりも速いスピードで売却を進めている」と話す。アセットマネジメントOneの清水岳友ファンドマネジャーは「為替ヘッジコストの上昇は続く」とみており、23年いっぱいには積極的に為替ヘッジ付き外国債券を買いづらいう状況が続くだろう」と分析する。